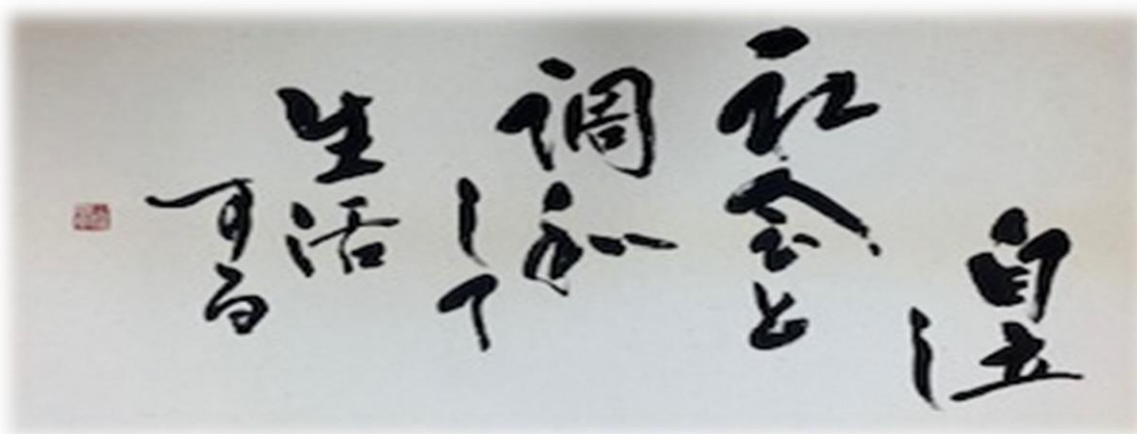


# 喜多原だより

NO. 72

令和2年



## 三つの支援方針について

喜多原学園 園長 田中 浩之

国立武蔵野学院の職員だった私に声をかけていただき、平成二十九年四月に喜多原学園に赴任して、早いもので三年が過ぎました。いよいよ、今月限りで関東に戻ることとなります。皆様にも助けられて、三年間、充実した日々を送ることができました。本当にありがとうございました。さて、一年目、二年目の喜多原だよりでは、理念と支援方針について書かせてもらいましたが、今回は、支援方針についての補足説明をしたいと思います。

### 【支援方針】

- ① 安定した生活と子どもの自主性を大切にすること
  - ② 個別支援と集団支援のバランスを大切にすること
  - ③ 学園が有する環境を大切にする
- ①の「安定した生活」を送るためには、子どもたちの行動を抑制したり、対人関係の調整をする等、職員がある程度、子どもたちを管理していくことが必要になります。安定した生活が基本的に成り立って初めて子どもたちの学園生活が有意義なものになるのですから、職員が管理することは、決して否定されるものではありません。しかし、子どもたちの安定を図る

ために必要以上の管理を行っていくことは避けるべきです。子どもを徹底的に管理していくと子どもは職員の指示には素直に従い、トラブルも少なくなるかもしれませんが、それは所詮「表面適応」でしかないのです。子どもの成長にとって、最も大切なことは自主的に判断して行動したり、物事を考えたりできることなのです。職員は、「子どもの自主性」を大切にすることは常に考えなければなりません。そういつたわけで、「安定した生活」と「子どもの自主性」は、対立項になっているのですが、両方とも必要なのなのです。この二つのことのバランスを如何にしてとっていくかが、「大切」なのです。

②の「個別支援」ですが、子どもたちの能力や性格、持っている課題は、本当に多様で、一人ひとり違います。以前は、学校教育でもそうですが、施設での支援は「十羽一絡」と言われる、子どもたち全員に対して、同じ対応をして、特定の子どものみに特別なことを行っていない「集団支援」が主流でした。その中でも時々、体罰やいじめが起きていたのも事実です。近年、子どもたちの中で対人関係がなかなか上手くいかない子ども（自閉的スペクトラム症等）や落ち着いていられず、

極端に集中力や注意力の欠ける子ども（注意欠如多動性障害等）の比率が多くなっています。喜多原学園の場合、現時点（令和二年三月）では、二十名中十四名（七十％）の子どもが何らかの障害があるのです。そういった子どもたちは、集団での支援が非常に難しいというのが定説です。従って、個々に応じた支援を行っていくことが適切であるというわけです。確かにそうかもしれませんが、他児との摩擦が全くない状態では、子どもは育っていきません。子どもは子どもの中で育つのです。だから、個別支援も大切だけれども、最近否定的になつている集団支援も大切なのです。これも①と同様にバランスの問題なのです。

最後の③の「環境」です。「環境」というと、特に喜多原学園の場合、恵まれた自然環境が思い浮かびます。しかし、環境には、自然環境だけではなく、住む場所である寮舎や登校する分校、運動をするグラウンドや体育館等もあるのです。これらは、物的環境です。そして、その対立項となる人的環境もあるのです。人的環境には子どもと職員、子ども同士、職員同士等の関係性が大きく関わってきます。それらを如何により良い関係にするかが、人的環境の質を決めます。人的環境（特に子

どもと職員の関係）ばかり重視し、草刈りをしないしていると自然環境である庭や畑は雑草だらけとなります。掃除をしないでいると物的環境である寮はゴミ屋敷になります。逆に人的環境（子どもへのいたわりや愛情）を疎かにして、自然環境である庭には雑草はなくなり、物的環境である寮は整然としてきますが、子どもの心は荒んでしまいます。やっぱりこの「喜多原学園が有する環境」もバランスなのですね。



バランスは、日本語では「調和」です。調和がキーワードです。「社会と調和した生活」を子どもたちが体得する（職員も同じです）ために、三つの支援方針があるのです。

## スポーツ活動

### 中国地区野球大会

〓野球部監督 内藤 和宏〓

今年度の中国少年野球大会は、島根県の出雲ドームで開催されました。喜多原学園は近年、九人揃うことがなく、職員を入れたオーブン参加（公式記録にはならない）でしたが、四月の時点で八人の児童がいて、「さすがにもう一人は入るだろう」とみんなで、全国大会を目指して頑張ろうと意気込みを持って練習を開始しました。大会当日、男子寮児童十人になり正式参加することとなり、全国大会を目指して大会に臨みました。

初戦の岡山県立成徳学校との試合では、序盤にリードするも逆転負け。次の広島学園との試合では、終始、有利に試合を進め、結果、勝利を収めることができました。正式参加での勝利は、私が喜多原学園に携わって、初！約二十数年ぶりの勝利でした。最終戦は、島根県わかたけ学園。勝利すれば優勝をかけたプレーオフになるということで、みんな気合も十分。先制点を奪い、守りでも普段以上のフラインプレーも出て、「これはいける

のでは」との勢いがありました。逆転され、負けてしまいました。一勝二敗の三位という結果でしたが、この大会では、勝利と同様にあいさつなどの礼儀に気を付けることやみなで元気を出して協力して頑張るという目標を掲げて取り組み、他の施設の職員からお褒めの言葉をいただくなど、目標以上の成果が出たと思います。「大会で身に着けたものを今後の生活に活かしていける」と、児童の成長と今後への期待を感じられた大会でした。





## 男子児童作文

今年、入所児童も多く野球大会に正式参加出来るのではないかと4月ごろから言われていて、練習を始めました。しかし、みんなが野球経験者ではなく、ここに来てから野球を始めたばかりの人が多かったです。昨年の経験がある人も少なく、はじめはどうしようかと思っていました。運動神経のいい人もいて、練習を重ね守備位置が決まってきたりしました。今年は優勝して全国大会を目標に、走り込みやバッティング練習、ノックなど監督やコーチ陣、寮の職員に練習をしてもらい、入所児童十名で大会本番に挑みました。

緊張した初戦では、練習試合で負けた成徳学校とあたり、先制点を奪うなど勝てるのではないかと思いましたが、後半に逆転され負けてしまいました。二試合目の広島学園との試合では、しっかりとみんなの声が出ており、緊張も解けみんながヒットを打つなどして、勝つことが出来ました。わかたけ学園との試合では負けてしまい、結果三位となりました。

みんなが、これまでの練習の成果を出し切り、一勝できたことはとてもうれしかったです。練習をしてくださった寮の職員や分校の先生、わざわざ県

外まで応援に来てくれた家族や関係者の方にとっても感謝しています。

これからの生活でも今回の野球大会のように、あきらめる事なく一生懸命何事にも向かっていくということを忘れずに行こうと思います。

## 中国女子児童バレーボール大会

バレー部監督 加川 綾子

今年度は、七月に入所児童が六名になり、単独での正式参加に向けて練習を進めていきました。普段の練習に加え、分校の先生や鳥取県BSA会の方と練習試合にも取り組みました。九月には神戸市若葉学園との練習試合もさせてもらいました。声の大きさ、技術の高さに圧倒されていました。子どもたちは刺激を受け、練習に取り組む姿勢が変わっていききました。

昨年度と比べ人数が増え、練習には活気が出ました。しかし、お互いの態度が原因で雰囲気が悪くなる場面もありました。その度に話し合いをして、目標を再確認することを繰り返しました。

今年度の中国バレーボール大会は鳥取県で開催されました。ご家族以外に、児童相談所の方や分校の先生、原籍校の先生、日ごろお世話になってい

る方々がたくさん応援に来てくださいました。その声援を受け、初戦の育成学校戦はフルセットのうえ勝利することができました。広島学園にはストリート負け、わかたけ学園、成徳学校にはフルセットに持ち込みましたが、残念ながら勝つことはできませんでした。悔しい涙を流しましたが、それ以上に、お互いをフォローしあうこととの大切さを実感できたと思います。

女子寮ではバレー練習だけでなく、普段の生活でも「マイナス発言禁止」を掲げて取り組みました。その意識は、バレー大会終了後も定着しています。まわりのことを考えて行動することができ、より前向きで元気な寮になりました。試合で勝つことよりも大切なことを、普段の生活に活かせることを非常にうれしく思います。応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

本格的にバレー大会に向けて練習が始まると、何度もけんかをして話し合いをしました。そのときには分校の先生方や寮職員さんに嫌な思いをさせてしまいました。しかし、先生方、職員さんは私たちの練習にすごく協力してくださいました。

監督は練習試合をくんでくださり、他県の人たちと練習することができ



女子児童作文

ました。そのおかげで強い人たちを見て学ぶことが出来ました。

大会前日にけんかをしてしまい、出場できるかわからないということが起こりました。その時に話し合いをして皆で出場したいという気持ちをきちんと確認することが出来ました。大会には、家族や児童相談所の方々、分校やフリースクールの先生が来てくださいました。私はお父さんと会うのが久しぶりで緊張していました。それでも「優勝」が目標だったので自分の力を精一杯発揮することが出来ました。しかし、一勝しかできませんでした。惜しいところで負けてしまった試合があり、とても悔しかったです。私は、六人で大会に出場できてよかったと思っています。一勝しかできませんでしたでしたが、皆で汗を流して笑顔でプレーすることで、より仲が深まりました。

来年こそ、賞状がもらえるように練習していきます。

### 中国地区児童駅伝・マラソン大会

～駅伝部監督 足立 渉～

今年度も男子寮で駅伝部を結成し、令和初となる第十九回中国地区児童駅伝・マラソン大会に出場してきました。

た。今年度は入所児童が多いこともあり、駅伝に喜多原から二チーム出場、マラソンには小中学生それぞれ一名が出場しました。夏休みの暑い日から日々練習に励み、三十分間走や十キロ走にも挑戦し、境港のサイクリングロードや緑水湖での練習、春から様々な地域のマラソン大会に出場する等、様々な場所でも走り、自信をつけ本番に臨みました。マラソンに出場し本番で自己ベストを出した児童、駅伝でタスキを繋ぎ全力で走る姿、大声で応援する姿等、たくさんの成果があった大会となりました。駅伝、マラソンを通じて鍛えられた心身を日々の生活にも繋げて、力として発揮していきます。応援していただいた皆様、日々の練習を手伝ってくださった職員の皆様、本当にありがとうございます。

～男子児童作文～

僕たちは、中国地方児童自立支援施設の駅伝マラソン大会に出場しました。

僕が特に印象深かったのは、練習の時にみんなが嫌だと言いつつ、駅伝練習が始まるとみんなが一生懸命練習に取り組んでいたところです。

大会の本番では、岡山県立大学の敷地をお借りして、チーム一丸となって

走り切りました。今年は入所児童も多く、AチームとBチームで出場し、Aチームは練習の時も大会の時も全員七分台で走り切ったのも思い出です。しかし、今回の大会では、区間賞は二位までで、僕は区間三位で惜しくも二位を逃してしまつて悔しかったです。でもこの悔しかった気持ちをばねに次出場する児童には頑張つてほしいと思います。



### 近畿地方児童自立支援卓球大会

～卓球部監督 堀江 健太郎～

男子寮の中学二年生以下の児童八名で、一月二十五日に兵庫県立明石学園にて行われた近畿児童自立支援施設卓球大会にオープン参加してきました。春は野球、夏は水泳、秋は駅伝とそれぞれ大会、記録会を目標に季節ごとの運動に取り組むのですが、これまで冬は特に何も目標となるものがなかったのです、この度試行的に表記の

大会参加を目指して卓球に取り組んでみました。三年生は受験間近であり、補習部(?)としました。

十一月下旬、練習を開始してみるとこれまで卓球に興味のない子、やったことのない子、苦手感の強い子などは意欲が出なかったり、真剣にやってみても手くできないのが嫌でふざけてしまつたり。意欲的に取り組んでも自分が思うようにできなかったり練習相手が上手に返せなかったりしてイライラしたり。

「どうせやるなら真剣にやってみよう。勝つた負けたよりも、うまくいかないときに自分がどうできるか、自分の気持ちばかりではなくて、どのようにして相手を大切にしながら協力して取り組めるか、それを身に付けるために卓球をやっているんだ。野球も、寮生活も、全部同じだよ」と伝えながら練習を続けてきました。

大会前日は神戸市立若葉学園の空き寮舎に宿泊させていただきました。到着するとすぐに温かい風呂を沸かしていただき、朝食は事前購入してきたのですが、目覚めると若葉学園の先生がご飯とみそ汁を用意して下さるなど、心温まる歓待を受けました。



大会当日、午前は団体戦。喜多原学園は滋賀県立淡海学園、神戸市立若葉学園とリーグ戦を行い二敗。五位決定戦でも京都府立淇陽学校と対戦して敗戦。結果は参加六チーム中最下位でしたが、シングル1と2の子がそれぞれ三戦二勝、その他の子もフルセットまでもつれたり、あと一歩で1ゲーム奪えるところまでいったりと、どれも白熱した試合でした。午後は個人戦。三人総当たりの予選リーグにて順位分けし、二人が二勝して一位トーナメント、一人が一勝して二位トーナメント、あとは二敗で三位トーナメントで戦いました。近畿の壁は厚く、多くの子はトーナメント一、二回戦で敗れましたが、どの子も強敵相手にも臆することなく最後まで堂々と精一杯戦い、その姿に思わず胸が熱くなりました。温かい思いと熱い思いをさせていただいた卓球大会でした。

### 男子児童作文

卓球大会にオープン参加で出場して僕は、卓球経験者であり今回の大会参加に向け、キャプテンを任命されました。キャプテンとしてまず何をしたらかという、今回は大会参加初めてということもあり練習メニューを考えるとところからのスタートでした。卓球

自体が初めての児童も多く、ラリーの練習から始め、スマッシュ、サーブ、レシーブ練習とメニューを組んでいき、少しずつ技術を習得していききました。初心者も経験者もみんなが一生懸命に練習に励んでくれました。大会では、みんなが出場できるように個人戦と団体戦に出場しました。団体戦では、負けてしまったけど練習してきたことを全力でやり切れたし、みんなも「全力が出せた。」と言っていて、すごくいいチームだったと感じれました。個人戦では、勝ち進んでいった人や敗退してしまった人がいましたが、悔いのない卓球大会参加になったと感じています。僕は来園は受験生で参加できるかはわかりませんが、参加する人はしっかりと練習をして、今年のようにやり切ったと言えるような後悔しないように試合をしてきてほしいです。

## 学園での思い出

### 女子児童作文

私は、一昨年の四月に入所してきました。私の学園での思い出は、キャンプや海水浴、サイクリングなどです。八月には、キャンプと海水浴に行きました。キャンプでは、分校の先生方

にも来ていただきました。みんなで賑やかに楽しくバーベキューをすることが出来て楽しかったです。食事のあとは肝試しをしました。寮の職員がお化け役となって、私たちをおどろかすに来た時は、怖くて泣いている子もいました。夜は寝れなくて、ずっと話をして怒られました。楽しかったです。海水浴では寮の児童が協力して焼きそばを作りました。すごく上手に作れて美味しかったです。海に入ってからテトラポットまで泳ぎ、魚を見つけてよかったです。

十月には、サイクリングに行きました。分校の先生もいて下さり、いろいろなアドバイスをしてくださいました。励ましの言葉をかけていただき、たくさんのお話を私たちに教えてくださいました。

私は、今までだったら経験できない事を、学園でたくさんさせていただけました。

これから退所して社会に出ても、いろいろな人たちに感謝の気持ちを持って生活していきたいです。



## 令和元年度着任職員

青砥 美紗

昨年四月に喜多原学園女子寮に着任しました。これまで児童と関わる経験が少なく、不安を抱きながらのスタートとなりました。支援の中で壁にぶつかる度に、園長や次長、先輩職員や分校の先生方からたくさんのご助言をいただきました。

相手を尊敬し、尊重することでお互いに気持ちを伝えあうことができ、自身の成長にもつながるのだと、学びました。また、日々の生活の中で、児童の成長を感じる場面に立ち会うことができました。それは児童自身が元々持っている力です。支援を行う中で、その児童が持つ力をどう良い方向へと繋げるのか、チームで考えていくのが大切なのだと感じました。今の自分のできる支援とは何かについて考え、児童と共に成長し行ける日々の業務を行っています。

田村 裕介

私が喜多原学園に来て、一年が経ちました。児童と過ごす日々の中で、私自身自分の人生、生き方を振り返ることがとても多くなったように感じます。児童の自立、社会との調和を目指

すこの場所で「自立」とは何か、今自分はその「自立」をどこまでできているのか、自問自答の毎日です。

児童と日々を共にする中で、他人に対しての向き合い方を改めて考える機会になったり、豊かな感性に触れ人間的な視野も広がっていきました。喜多原学園は自分にとっても大きな成長の場です。新卒で喜多原学園に来ることができたことに、心から感謝し、喜びを感じています。

ある日「田村さんには今後の人生の中でも関わってほしい。」と児童が言ってくれたことがあります。その時、自分という存在を誰かが心の中に残してくれるということは、とても幸せなことであると感じると共に、責任の重さを改めて感じました。一つの大人のモデルとしてこれからも自分らしく、児童と近い目線で「自立」に向けて歩みを続けていきます。

石田 良宏

令和元年十一月一日により喜多原学園の非常勤の自立支援専門員としてお世話になることになりました。石田良宏です。喜多原学園は平成二十八年三月以来約四年振り、男子寮に至っては平成十九年三月以来約十二年振りになります。

子どもとの暮らしの中で、自分の知識と経験を活かしていければと思います。

新たな『出会い』を大切にしながら、体力・気力の続くかぎり子どもと共に生活しながら、頑張っていきたいと思えますので、よろしくお願いします。

難波 陽介

私は、年度途中の六月に喜多原学園に異動して来ました。赴任した当初は、社会人になり十数年経ちますがこれまで児童分野での仕事をしたことがなくとても不安に思っていました。

ここで仕事をし、児童たちと一緒に生活し関わっていく中で、大人である自分とはどうあるべきか、そしてどう児童に伝えるべきなのかを考えるようになりました。自分自身の未熟さを認め、成長をどう自分で感じ、どのように相手の成長も感じられるかが必要であるかと思いました。

責任ある一人の大人として、児童とともに生活する中で、成長を感じられるような生活を今後も送れるように頑張っていきたいと思えます。

## 米子市立福生中学校 いずみ分校

教頭 吉田 豊

「幸せだなあ」

私が初めて、いずみ分校の玄関に入る際、思わず出た言葉です。美しく雄大な大山の姿に感動しながらの通勤。

「チュンチュンチュン」、「ホーホケキョ」、辺りの木々から聞こえる小鳥の声。草木が芽吹き、若葉のみずみずしく美しい緑色。喜多原学園の素晴らしい環境の中で始まる新しい生活への期待が大きくなりました。

あれから一年、「幸せだなあ」と思う気持ちは日々、大きくなりました。その理由は、次の三つの出会いが大きな要素だったと思います。

一つ目は、初めてこの気持ちにさせて頂いた、恵まれた自然・環境に出会えたことです。それぞれの季節で、自然の美しさはもろろん、その厳しさも身近に体験できました。

二つ目は、喜多原学園の理念「子どもが自立し、社会と調和して生活することを支援する」に出会えたことです。「何のために『生きる力』（知・徳・体のバランスのとれた力）をはぐくむのか」、「何のために勉強するのか」、「何のために学校へ行くのか」などに

対し、自分なりの考えを整理できました。

三つ目は、教職員の皆さん、児童・生徒の皆さんと出会えたことです。学園と分校の先生方は協働して、真摯に子どもたちと向き合っていました。また児童・生徒の皆さんの明るく元気なあいさつ、活動時の応援や励まし合う姿、そして意欲的な学習への取り組み等、何事にもひたむきに打ち込む姿が見られました。大人も子どもも、学園の理念のもと、みんなが同じ目標を達成するために、互いにリスペクトし合い、良い関係が築けていたと思います。

このような素晴らしい出会いに恵まれ、幸せな一年間を過ごせました。しかし私は、たった一年でいざみ分校を去ることになりました。これから私にできることは、この幸せな出会いを多くの人に伝えることです。それを通して、喜多原学園を正しく理解してもらえよう努めていきます。

私は心の底から、この出会いに感謝しています。ありがとうございました。

英語教科担当 西山 正一

私は高校二年生のときに大動脈の病気を発症し、入院を余儀なくされた経験がある。当時の私は部活動で全国大会へ出場することが最大の目標で

日々練習に励んでいたが、入院により生活は一変した。入院生活はいやでたまらなかった。同室の患者さんたちと自分が同じだと思いたくなかった。彼らは病人、私はアスリート。彼らと私は違うのだ、ここは私のいるべき場所ではないと思っていた。しかし入院生活を送るにつれ、私の考え方も少しずつ変わってきた。患者さんたちの多くは心臓病で入院しておられ、顔色も青白かった。しかし日々のちよつとしたことに感謝し、一生懸命に生きようとしておられた。私は今まで生きていることは当たり前のことだと思っていた。健康でいることに感謝などしたこともなかった。健康は失いかけて初めてそのありがたさがわかるのだ。入院生活を通して私は、病室は絶望の場所ではなく、生きようとする意欲に満ちあふれた場所だと知った。

入院生活は五十日ほど続き、退院の日を迎えた。うれしいはずの退院だが、私はあまりうれしくなかった。私に今まで知らなかった世界を教えてくれた病院での生活をもう少し続けてみたいと本当にそう思ったことを覚えている。

喜多原学園での生活は入院生活に似ている。喜び勇んで喜多原学園に入所してくる者はいない。初めは敵意む

き出しの表情で周囲を警戒する者、心を閉ざし、周囲と距離を置く者など様々である。しかし学園で生活するうちに彼らの表情も徐々に変わってくる。そしていつしか普通の子どもらしい姿になっていく。そんな姿に入院生活での自分を重ね合わせてみる。時と場所は違うが、彼らはかつての私と同じような道をたどっているのだと思う。

いざみ分校では学園行事だけでなくキャンプ、サイクリング、バイキングなど寮行事にもたくさん参加させていただいた。分校でまもなく六年が終わろうとしている。そして同時に私も定年を迎えようとしている。教員生活の最後に教育と福祉の協働を具現したすばらしい職場で過ごさせていただいたことに感謝している。



すいかながいもマラソン



田植え体験





中学校 修学旅行



保育交流 芋の苗植え



サッカー試合観戦



小学校 修学旅行



梨狩り



湖山池マラソン



とんどさん



稲刈り体験



## 令和2年度 喜多原学園年間行事

4月 着任式 始業式 観桜会

5月 芋の苗植え

※今年度行事は、新型コロナによる影響で、現在見通しが立っておりません。適時、行える行事を企画していきます。

## 後援会報告

一、令和元年度事業報告	令和元年度歳入歳出決算	令和2年度歳入歳出予算
一、令和元年度収入支出決算報告	収支決算額 575,418円	収支予算額 275,000円
一、会計監査報告	支出決算額 540,818円	支出予算額 275,000円
一、令和2年年度事業計画（案）	繰越額 34,600円	
一、令和2年度収入支出（案）		

【後援会役員】※敬称略・順不同

会長	赤沢 亮正	委員	関山 公郎	委員	保坂 葉子
副会長	上森 英史、本田 修	委員	山船 茂樹	委員	加川 綾子
事務局長	馬詰 俊哉	委員	長尾 修		
監事	中川 正純	委員	藤原 敏朗		
監事	松永 芳久	委員	大鶴 憲司		

会員数 48名（R2, 4, 1現在）

御寄付ありがとうございました。※敬称略・順不同

- ・（株）備中屋本店 代表取締役 上森 英史
- ・馬詰 俊哉（元喜多原学園長）

### 児童在籍情報

	小学生		中学生		中卒生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
H31 4月1日	0人	1人	7人	2人	1人	1人
R1 1月1日	1人	1人	12人	3人	0人	2人
R2 4月1日	3人	0人	5人	2人	0人	3人

## 教職員の異動

### 学園職員

(令和元年11月1日付)

着任 児童自立支援専門員(非常勤) 石田 良宏

(令和2年2月29日付)

退職 現業技術員(非常勤) 松本 良典

(令和2年3月31日付)

退職 園長 田中 浩之

児童自立支援専門員 音田 幸真

児童自立支援専門員 青砥 美紗(厚生労働省)

転任 児童自立支援専門員 松田 治(福祉相談センター)

児童生活支援員 福田 千明(総合療育センター)

児童生活支援員 足立 渉(皆成学園)

現業技術員 松尾 あけみ(西部総合事務所)

(令和2年4月1日付)

着任 園長 大鶴 憲司(福岡県立福岡学園)

児童自立支援専門員 光宗 哲平(厚生労働省)

児童自立支援専門員 西尾 弘規(新規採用)

児童生活支援員 岩田 香織(皆成学園)

現業技術員 前田 隆文(西部総合事務所)

現業技術員(会計年度任用職員) 荒木 清之

### 分校、分教室教員

(令和2年3月31日付)

退任 教諭 西山 正一

転任 教頭 吉田 豊(米子市立福生中学校)

講師 藤井 勝己(米子市立尚徳中学校)

(令和2年4月1日付)

着任 教頭 森脇 宏(米子市立尚徳中学校)

教諭 永見 剛(米子市立福生中学校)

講師 小別所 光(南部町立西伯小学校)

講師 並里 育子(南部町立会見第二小学校)

#### 編集発行

#### 鳥取県立喜多原学園

鳥取県米子市泉706

TEL 0859-27-1101

FAX 0859-27-1611

#### 編集後記

喜多原だより No. 72号を作成させていただきました。

編集作業の中で、児童と過ごした日々を振り返り、児童の成長を感じるとともに、様々な表情を見られてとても嬉しく思いました。今後も学園職員が一丸となって、より良い支援ができるように努力していきたいと思っております。

日頃お世話になっている地域の皆様、学校の先生方、関係者の皆様に、学園職員一同、深く感謝申し上げます。今後とも御支援、御協力いただきますようよろしくお願いいたします。